

“創知協働の森づくり”と“循環利用の森づくり”を進めよう!



© 静岡県

■表紙写真 題名：山の神 撮影場所：浜松市天竜区龍山町 撮影者：大野 重男 氏（浜松市）

INDEX

2

首長は語る

自然と歴史と文化に恵まれて

3

森林・林業研究センターだより(No.58)

森林土壌の炭素固定量調査

4

現地レポート

中遠地区林業研究協議会 林ベニヤ産業視察

5

地域だより

花と海といで湯の街 伊東

6

県庁だより

本県のしいたけ産業の振興について

8

林政ニュース

第13回森の感謝祭開催

8

事務局だより

首はる 長語

自然と歴史と文化に恵まれて

河津町長 櫻井 泰次



魅力ある町河津町

河津町には海があり、山、滝もある。河津川は、天皇陛下に鮎を献上するような綺麗な川で鮎の住処となっている。そのうえに素晴らしい温泉が点在し、自然資源が豊かである。

クスノキの大木が境内にある河津神社（来宮神社）は、1200年位の歴史があり、また、「河津三郎」と言う名が示すように「河津の庄」が綿々と現在に繋がっており、伊豆地域でも一番古い歴史を持っている。

近年においては、川端康成が「伊豆の踊り子」を執筆した宿もあり、文学的にみても大変恵まれた魅力ある町と考えている。



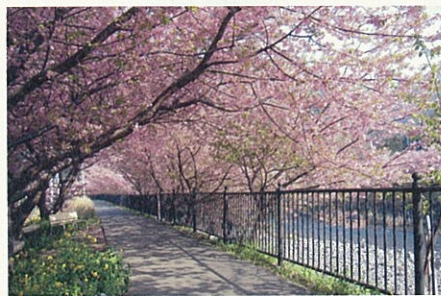
▲七滝（初景滝紅葉）

花に彩られたまち河津

花の町と言うことでお客さんを取り込むべく大いに宣伝をし、河津桜については1ヶ月間に100万人のお客さんを10年間キープするなど、伊豆半島で

はどこにも負けない花の町となっている。

河津桜に始まり、フランスパリ市と提携して作ったバガテル公園のバラ、日本一早咲きの花菖蒲園、カーネーションなど様々な花が年間を通して観光客を魅了している。歴史・文化と自然を踏まえた花の咲くまち河津として、さらに町づくりを進めている。



▲河津桜並木

自然を大切にしてお本物で勝負

峰温泉には約25m吹き上げる東洋一の大噴湯があり、この大噴湯が一年中見られるよう、12月末の完成を目指し公園整備をしている。さらに、天城山から連なる良好な自然環境を観光客に提供し、花と連携して町の魅力を高めていくことが重要と考えている。

また、海岸は出来る限り自然な地形を活かし、海水浴、磯遊び、釣りを楽しむ事できるように整備をしたい。

温泉浴、海水浴、森林浴の3つが楽しめ、宿泊者には地元で採れた山菜やイノシシ、シカなどの山の幸、鮎、山女の川の幸、あわび、サザエ、伊勢えび等の海の幸など地元で採れた本物の食材を提供できる事が町の大きな魅力である。

自然を満喫 セラピーロード

伊豆元気わくわくの森公園には「鉢

の山森林セラピーロード」がオープンした。ハリスが歩いた下田街道と言う歴史があり、天城山から大池・小池、七滝・湯ヶ野温泉、東伊豆や西伊豆を結ぶ約30kmの遊歩道が整備されており、多くの人が自然を楽しむ世の中となり、森林セラピーロードのような場所が必要となってきている。

このような森林セラピーロードや基地は、今後、全国的に整備が進み、目的がよく理解されて、観光と健康づくりの場所として親しまれていくと思う。



▲セラピーロード

森林への期待と活用

森林は、林業としての勢いを期待することが難しく、年々、厳しい状況となっている。

一部に、ログ材として使用するため地域の良材を取扱う工務店や、山林所有者が製材機を持ち、製品まで仕上げで付加価値を高めて販売するなど工夫している例もある。だが、業として携わる人が少なく、年々、山を管理していく事が大変となり、全く手入れがされない森林が増えてきている。

しかし、町の83%が森林面積であり、資源として活かしていくことが大切である。今ある森林を間伐し金をかけないで観光にも利用し、伊豆の良さを発揮させ世界から観光客を呼び込むことが重要である。

環境を意識して整備し、観光と結びつけた森林の活かし方を考え、本物志向に対応して河津町を振興することが大切である。



▲鉢の山

森林土壌の炭素固定量調査

研究スタッフ(森林育成) 渡井 純

調査結果と今後の方向

各調査地の土壌深30cmまでの土壌炭素量は、およそ40ton/ha~80ton/ha、平均では65ton/ha程度となりました(図-2)。これはスギ立木材積に換算すると、約400m³に相当し、立木バイオマス量(幹・枝葉・根)で考えるとおよそ20年生の林分と同等の炭素量となります。

今回調査を行った調査地の森林土壌タイプは、そのほとんどが褐色森林土であり、県内の代表的な土壌タイプであるため、計測された森林土壌炭素量は、概ね本県の標準的な値であると推察されます。この値は、環境省により報告された、「日本国温室効果ガスインベントリ報告書」に示されている国内の森林土壌炭素量の全国平均値(86ton/ha)と比較してやや低めの値ではありますが、相当量が土壌中に蓄積していることが分かります。

次年度からは「森林による二酸化炭素吸収量の把握に関する研究」を重点試験研究課題として位置付け、今回の調査結果を活用して、様々な森林土壌タイプを有する本県全域の森林土壌を対象とした二酸化炭素蓄積量の把握に取り組んで参ります。新たな成果が得られ次第報告していきたいと思ひます。



▲土壌炭素量調査土壌断面

森林が、地球温暖化防止に果たす役割を明らかにする目的で実施されている「森林土壌の炭素固定量調査」に関する情報と研究成果について報告していただきました。

京都議定書により定められた、二酸化炭素等の温室効果ガス排出削減目標達成の第一約束期間が本年から始まり、現在各関係機関は削減目標達成に努力しているところです。森林も目標達成の重要な一翼を担っており、二酸化炭素吸収源としての期待がますます高まっています。

森林土壌炭素固定量調査の現状

森林の炭素固定能力でまず思い起こすものとして、樹木が挙げられます。樹木がその成長の過程で二酸化炭素を吸収し、炭素として体内に蓄積することは、皆さんも良くご存知のことと思ひます。では森林土壌についてはどうでしょう。樹木や下層植生などの植物体に比べ、吸収能力は低いのですが、永年にわたり蓄積されてきた炭素量は、植物体にも引けをとらないほどで、京都議定書で定められた二酸化炭素吸収源項目の一つにもなっています。しかし、本県における森林土壌炭素量は、今までに詳細な調査がほとんど行われていないため、吸収源効果を把握するだけのデータは残念ながらありません。このことは、全国的に言えることで、現状では、森林土壌炭素量に関して、京都議定書に基づく報告を満たすことができません。そこで、林野庁が主体となり、平成18年度から22年度までの5ヶ年で、全国3,140(計画)地点において、森林土壌炭素量調査を行うことになりました。

森林土壌炭素固定量調査方法

当センターにおいても、県内の民有林46地点について、平成18年度から調査を行っているところであり、現在、18地点で調査が終了しています。調査は、県内各地の「森林資源モニタリング事業」の特定調査プロット内で行いました(図-1)。調査地内の4箇所において横幅50cm、深さ40cmの土壌断面(写真)の調査を行った後、堆積有機物と土壌試料を採取しました。土壌試料は、層深0~5cm、5~15cm、15~30cmの3層で、容積重測定用及び炭素量分析用の試料をそれぞれ採取しました。採取した土壌試料から、各層における土壌容積重の測定と、C/Nコーダーによる土壌炭素量の測定を行いました。



図-1 調査地位置図

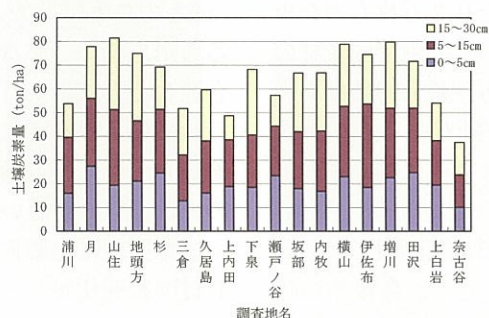


図-2 土壌深30cmでの土壌炭素量

現地レポート

中遠地区林業研究協議会 林ベニヤ産業視察

森町森林組合 鈴木 啓史

中遠地区林業研究協議会で石川県のベニヤ産業を視察した模様を協議会事務局を担当している鈴木啓史さんに報告していただきました。

1. 始めに

中遠地区林業研究協議会では、林業の活性化と会員相互の親睦、意見交換を目的として、2年に1度の県外視察研修を実施しています。当協議会の事務局である私は、研修先の選定に頭を悩ませていたのですが、会員の中から近年国産材の需要の著しい合板工場を見学したらどうかとの声が上がリ、去る9月15日、石川県にある林ベニヤ産業七尾工場を視察して来ました。

私自身、木材加工業の工場視察は経験がなく、有意義なものとなりましたので現地レポートとして報告したいと思います。



▲工場内見学

2. 現地レポート

林ベニヤ産業七尾工場では1日あたり900^m、年間約22万^mもの原木を消費しており1日当たり3万枚もの合板を製造しています。その中で国産材のシェアは60%強であり将来的にはシェア100%を目指す方針だそうです。合板は主にハウスメーカーに納められています。

しかし、現状では国産材を1日600^m集めるのが限度で、今後その供給量が課題と考えているようです。原

木は主に石川県森林組合連合会が窓口となり取りまとめているのですが、山梨県産材に関しては単位組合による搬入もあり、また個人の搬入も受け入れるそうです。

【国産材シェア内訳】

スギ	カラマツ	アカマツ	ヒノキ・サワラ
45%	30%	24%	1%



▲土場の状況

今後国産材のフィールドも集約化や低コスト化が進めば1日900^mの搬入もいずれは可能になってくることは十分考えられます。

そこで気になってくるのが原木の仕入れ単価ですが、末口18cm上(4m)の場合スギ 9,000円/^m、ヒノキ 11,000円/^mだそうです。対して外材の単価はロシア材18,000円/^m、米松20,000円/^mとのことでした。主な供給元である石川を始めとする中部5県の森林組合連合会とは3ヶ月に1度価格交渉を行っているそうですが、外材がこの価格ならば国産材の価格も交渉力があるのではないかと思います。

また国産材を搬入する場合、A材とB材の差別化がしっかり行われるのか懸念されますが、林ベニヤでは価格変

動はあるものの、ヒノキA材は18cm上(4m)が13,500円/^m、18cm上(2.1m)では12,000円/^mでの取引事例があるそうです。これらは生産量が少ないものの、オールヒノキ合板として使われているとの事で、高価格で買う代わりに産地へ戻しブランド材としてしっかり売ってもらうというような販売戦略に基づいているようです。また、今のところオールスギ材での合板開発は予定がなく、その原因には強度の問題が大きいようです。合板用原木の規格についてですが、小曲がりや黒芯、枝虫材などは問題がなく、含水率は高いほうが良いそうです。末口径においては14cm~70cm(4m)の仕分けの必要がなく山土場での選別は省略化できそうです。

【合板生産量内訳】

オール国産材	オール外材	国産材+外材
15%	10%	75%



▲オールヒノキ合板

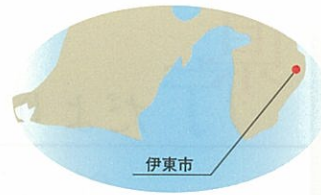
3. 終わりに

視察を終えて、合板産業は山側にとって今後も目の離せない存在であると感じました。

価格競争のなかで山側が主導権を握ることが難しい近年の現状ですが、合板業者は原木単価を安くすることが利益を上げる一つの方法と考えているようでした。しかし山側がコストを下げるだけでなく、安定した量の原木を供給しても、適正な価格を提示されなければ、林業の苦しい状況はなかなか打開できません。林業と木材加工業が共存できるような価格体系が必要ではないかと思います。

私自身も今回の研修を機に今まで以上に木材加工業に興味を持ち視野を広げていきたいと思いました。

地域だより



花と海といで湯の街 伊東

伊東市 産業課 上原 裕 司

伊東市職員一年目の産業課上原裕司さんに、伊東市の森林施業の状況や市の主なイベントを四季をとおして紹介していただきました。

はじめに

私は今年度の4月から採用になったばかりの新米で、森林に関する知識は全くありませんでした。聞く言葉、聞く言葉がまったく聞き慣れない専門用語ばかりで、まるで外国語を聞いているようでした。この先やっつけいけるのかという不安を抱え、日々の業務をこなしている毎日です。私のような者がこのようなレポートを書かせて頂くことなど、本当に恐縮です。

伊東市の概要

さて、私の勤務する伊東市は、静岡県の最東部に位置し、伊豆半島の東海岸にあって、東は相模湾に面し、西は伊豆市、伊豆の国市、南は賀茂郡東伊豆町、北は熱海市に接しています。

気象条件は平均気温16.9℃、年間降水量は1944.5mmとなっており、市域は、天城連峰を背に、宇佐美火山と先原火山の裾合いに東南面に傾斜した、東西10.45km、南北20.45kmにわたる総面積124.13km²の地域で南北に不整の長方形をなし、南北延べ40kmに及ぶ海岸線を有しており、地形は多賀・宇佐美火山、大室火山を主とする火山噴火物により形成され、



▲森林吸収源対策緊急整備事業施工地

平坦地は少なく起伏のある急斜面が多くを占め、海岸に面した平坦地に市街を構成しています。

国立公園は、南部地域を中心に市域の約45%を占め、城ヶ崎海岸や大室山、一碧湖等の景勝地に加え、伊豆高原地区の別荘地には、ペンションや美術館が数多く点在し、季節を問わず賑わいを見せています。

当市の産業別就業割合では、第三次産業従事者は80.3%となっているのに対し、第一次産業従事者は2.6%となり、市内の産業構造は、観光産業を主体とした第三次産業の形態をなしています。

伊東市の森林施業

近年、地球温暖化が深刻な環境問題となる中で、環境資源としての森林に対し強い期待が寄せられていますが、当市の森林施業を取り巻く情勢は依然として厳しく、停滞している状況にあります。

整備者が不足していることや林業採算性の悪化、担い手不足などが原因で、森林所有者の施業意欲・意識が低下し、未整備森林が点在しているのが現状です。

当市では、こういった現状を打開するため、平成19年度から県単独補助事業の「森の力再生事業」や、国庫補助事業の「森林吸収源対策緊急整備事業」、今年度はグリーンバンク補助事業の「四季を彩る森林景観づくり事業」などの間伐事業を実施しています。

今後は、特定間伐等推進計画を策定し、市有林や財産区有林などを対象に積極的に間伐事業を実施していく予定です。

季節の行事

【春】伊豆高原桜まつり

期間中は青空市（模擬店、植木市など約120店）やミニコンサートなどが行なわれます。約3kmにわたる桜並木をお楽しみください。



【夏】松川タライ乗り競走

伊東の中心を流れる松川で、直径約1m、深さ約30cmの大きなタライに乗って、しゃもじのような櫂（かい）でこいで川を下るレースです。観光客レースや団体レース、国際レース、個人レース、花笠レース、子供レースなど様々なレースがあります。



【秋】伊東温泉秋のおさかな市

漁協直営の定置網であがった新鮮な魚、地場産の干物などをお得な値段で販売します。海鮮食品の販売や、海鮮みそ汁の無料サービスなど、伊東の旬を丸ごと味わえます。



【冬】大室山山焼き

約700年前から続く伝統ある野焼きです。山すそより点火し、標高581m、約100haのカヤの山が30～40分ほど真っ黒になります。先着100名の方は松明点火の体験ができます。



おわりに

私がこの半年間、業務の中で森林に携わってきた中で感じたことは、森林の持つ多様性や、人間の生活との係わりを考えると、様々な物が機械化され、自然と触れ合う機会が少なくなってきた時代だからこそ、森林を整備し、自然と触れ合う場所を作ることの重要性を感じました。

また、市内の森林については、まずは現地に向き、地域の森林を知ることが重要だと併せて感じました。



県庁 だより

本県のしいたけ産業の振興について

— 伊豆市で「第4回原木しいたけ生産者大会・技術交流会」が開催されました。—

県産業部農林業局 林業振興室 生産スタッフ

今年9月4日に伊豆市で開催された「第4回全国原木しいたけ生産者大会・技術交流会及び現地研修会」の様子が静岡県らしいたけ産業の現状と課題を林業振興室より紹介していただきました。

本県におけるしいたけ産業の現状と課題

本県におけるしいたけ生産は全国でも上位に位置しているところですが、昭和60年をピークに減少しており、近年は生しいたけは約2,000t、乾しいたけは約200tで推移しています(図-1, 2)。特に平成19年は、しいたけの生育には厳しい気象条件となり、生しいたけ1,774t、乾しいたけ139tと大幅に減少しましたが、本年の春子の収穫は持ち直してきています。また、原木しいたけ生産では不安定な気候条件による収穫量の変動を受けない出荷体制、生産者までのトレーサビリティ、作業の効率化

と生産量の増加、後継者不足等が課題となっています。

また乾しいたけの市場価格については、消費者の食品に対する安全・安心や、地産地消の関心の高まり等を背景に上昇しており、昨年秋以降キロ当たりの平均が4千円台半ばから5千円前後(JA伊豆の国乾椎茸入札会平均単価)となっています。

取組み

本県では、しいたけ産業の振興を図るため、原木栽培によるしいたけ生産を中心に、品質が高く、収量の多いしいたけ栽培の普及指導を実施するとともに、しいたけ関連業界が行う椎茸加工品カタログなど消費者向け情報の提供や「きのこ祭り」をはじめとする各種PRイベントの開催、「清助どんこ」など産地ブランド確立に向けた取組に対して支援を行うなど、生産技術の普及や消費拡大等の事業を推進しています。

原木しいたけ生産者大会開催

このような中、優良生産事例等を基にした技術交流を通じて、各地の生産者が必要とする高いレベルの経営、技術情報等の共有を図るとともに、生産振興と需要拡大に向けた課題を明らかにして、今後の原木しいたけの生産拡大へのステップとすることを目的に、平成20年度「第4回全国原木しいたけ生産者大会・技術交流会及び現地研修会」(主催：日本

図-1 静岡県の乾しいたけ生産量の推移

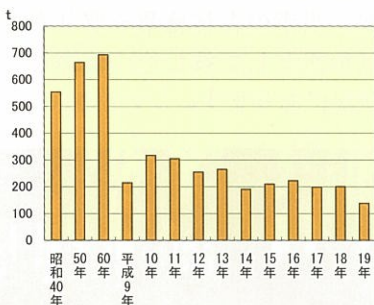
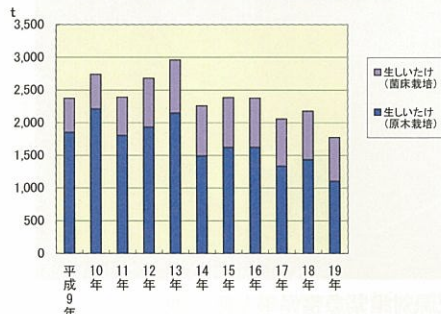


図-2 静岡県の生しいたけ生産量の推移



現地研修会

天候に恵まれた5日(2日目)には約200人が参加し、伊豆市内の生産者の朝香精一郎氏、杉本勝彦氏、小柳出勝氏、及び「修善寺しいたけの里」の生産現場を会場に現地研修会が行われました。各研修現場においては、生産者の方からしいたけ生産に関する取組み、経営の概要、特徴、工夫点などの説明があり、意見交換が行われました。



▲現地研修会：杉本勝彦氏
乾椎茸生産現場(伊豆市)

最後に

全国の原木しいたけ生産者がしいたけ栽培の発祥地とされる伊豆に一堂に集い、経営や販売の情報交換、技術交流などが図られ、大変意義深いものとなりました。全国からの参加者のほか、本県のしいたけ生産者等関係者にとっては、今回の大会が各々の地域においてのしいたけ生産の技術力や経営の更なる向上のきっかけとなり、今後のしいたけ産業の一層の振興が図られることが期待されることです。

また県といたしましても、この大会を契機に、認証制度への取組み、生産施設への支援等、しいたけ産業の振興が図られるよう支援してまいります。

最後に、地元伊豆市、田方椎茸生産者組合、伊豆の国農業協同組合の方々には、本大会開催の準備段階から当日の運営に至るまで御協力いただき、ここに感謝を申し上げます。

特用林産振興会、後援：林野庁、静岡県、伊豆市)が9月4日～5日、しいたけ栽培の発祥地とされる伊豆市(旧修善寺町)の「ラフォーレ修善寺」において、県内、県外(23都県)のしいたけ生産者、椎茸産業関係団体、JA、種菌メーカー、行政等約420人(県内生産者等関係者約240人、県外生産者等関係者約180人)が参集のもと開催されました。



▲榛村純一会長、開会の挨拶

技術交流会(部会)

技術交流会では3つの部会に分かれ、全国から選ばれた生産者による事例発表の後、質疑応答、意見交換という形で行われました。

最も多い約200人が参加した「乾しいたけ部会」は、「栽培面、販売流通、将来展望」をテーマに意見交換が行われ、本県からは福室勝義氏(伊豆市)が事例発表し、「種駒1個あたりの収量、収益を経営指標に捉え、乾しいたけ栽培専業でも経営が成り立つことを実証」など、栽培、将来展望に至る事例が発表されました。会場からは「研修制度を設けるなど後継者育成対策を行い、新たな生産者を掘り起こす必要がある」と総括しました。

「生しいたけ部会」は約80人が参加し、「収量確保、販路拡大」をテ



▲渡辺一義氏(藤枝市)優良事例発表

マに2人(本県からは渡辺一義氏(藤枝市))が事例発表しました。渡辺氏は、「ホダラックの利用、植菌機の導入により省力化を図り、クヌギ原木を使って1本当たりの収益増大を目指す」との思いを発表しました。

意見交換後コーディネーターは、「原木しいたけ栽培の生産拡大を行うためには、生産者が儲かる栽培でなければならない。ほだ木一代の収量増加の追及、儲かるしいたけ栽培を実現するためには、常に栽培技術に対する探究心を忘れず努力し、生産を安定させ市場ニーズに応えること。」と総括しました。

「販売戦略部会」には約100人が参加し、テーマ「定量出荷・安定供給、差別化・ブランド化」により意見交換が行われました。

本部会では「①いかに消費の拡大をしていくか、②消費者ニーズのつかみ方、③原木の良さのアピールをどうしていくか」の課題に、「作る人が元気でなければ!原産地表示の改正の早期実現を!」と総括しました。

技術交流会(全体会議)、生産者大会

引き続き行われた技術交流会の全体会議では、①対馬の原木対策(長崎県)、②静岡県における鳥獣被害の現状とその対策(静岡県)、③大分トレーサビリティシステム(大分県)のテーマにより、それぞれの県担当者から現状と推移が話題提供されました。

また、生産者大会では「乾しいたけ部門」、「生しいたけ部門」、「乾・生しいたけ部門」、「新規参入者・後継者部門(新設)」の4部門ごとの優良事例受賞者の表彰が行われました。本県からは次の3名の方が受賞しました。

【静岡県生産者の優良事例表彰受賞状況】

部門	賞	受賞者名
乾しいたけ	日本特用林産振興会会長賞	福室 勝義氏(伊豆市)
生しいたけ	林野庁長官賞	渡辺 一義氏(藤枝市)
乾・生しいたけ	全国食用きのこ種菌協会会長賞	鈴木 紀矢氏(伊豆市)

第13回森の感謝祭開催

去る10月12日(日)第13回森の感謝祭はメインテーマを「森林公園・秋の一日体験イベント」として、静岡県立森林公園運営協議会主催で、本年度から園内の施設をより多くの県民の皆様にご案内いただくために、ビジターセンター「バードピア浜北」前広場を第一会場、木工体験館を第二会場として開催され森の体験イベントと森のパネル展などの多彩な催しが行われました。秋晴れの晴天にも恵まれて、森林浴を楽しみながら3,500人余の来園者で賑わいました。

1. 「森の体験イベント」

第一会場では、ドングリやマツカサ、木片など自然素材を使った壁掛けや動物などのネイチャークラフト、蔓細工や丸太きり、森を散策しながらのネイチャーゲーム、木の板に図案をカラーリングして作品を仕上げるトルペインティング、きのご観察会、竹細工、木の実の試食、草笛体験、第二会場では、木工作、巣箱作り・巣箱掛け、木

のペンダント、ススキでふくろう作りなどの体験イベントが行われました。



▲ススキでフクロウ



▲きのご観察会

終日子どもから大人まで熱中する姿があり大盛況でした。今年は体験型イベ

ントを主に開催しましたが、こうした遊びや体験を通して森や自然と触れ合うことの大切さを体験していただきました。

2. 「森のパネル展」

第一会場で森の持つ水土保全機能や生命財産を守る森の働きなどのパネルや竹材が治山工法に多く利用されていることなどから、子ども達を対象に竹細工や森づくりの情報発信とともに緑の募金活動と地球温暖化対策などのパネル展示等、また、森の魅力を伝えるパネル展と森林鑑定団の魅力体験と広報が行われました。森の恵みの有難さ、森との関わりを見聞していただきました。

3. おわりに

今年は、会場を変えての単独開催であったが好天にも恵まれ、参加された多くの皆さんに、体験を通して森の恵みや森の働きを実感していただき森と人との共生の大切さを改めて感じ取っていただく機会となりました。

今後とも定着する体験型イベントとなるよう関係者一同努力してまいります。皆様の来園を心よりお待ちしております。

(静岡県立森林公園運営協議会)

事務局だより

★山から里へ、北から南へと紅葉前線の便りが、各地より聞こえてきています。

ぜひ、忙しい時間を割いて紅葉狩りに出かけ、素晴らしい山の景色をご観覧いただきたいと思います。

★紅葉といえば、「平成20年度しずおか森林写真コンクール」の入賞作品を「森と人10月号」に掲載しましたが、表紙を飾っている佐藤美栄子氏の最優秀賞(知事賞)作品は、静岡市梅ヶ島安倍峠の見事な紅葉の景色です。

★10月24日に「しずおか森林写真及び治山・林道工事コンクール表彰式」を行いました。

表彰式には両コンクールの受賞者をはじめ、日頃よりコンクールの実施に多大な御支援・御協力を頂いている県

建設部森林局長はじめ、県職員の皆様の御出席をいただき、賞状と記念品を授与し無事終了することが出来ました。



★工事コンクールの受賞者は次の皆様です。

1. 治山工事コンクール

協会支部名	工事名等	受賞者
賀茂	寺ノ向工事	東海建設(株)
東部	綱山工事	東静建設(株)
中部	関ノ沢工事	静鉄建設(株)
志太榛原	下島工事	(株)山田組
中遠	天宮工事	(株)ジーバック
西部	河内沢工事	(株)飛鳥

2. 林道工事コンクール

協会支部名	工事名等	受賞者
中部	権七峠線②	(株)山俊市川組
志太榛原	びく石大沢線②	森田建設(株)

★次年度も両コンクールを実施する計画です。本紙をご覧いただいている方はもちろん、多くの皆様のご参加をお願いします。(本間)

社団法人 静岡県山林協会
静岡市葵区追手町9-6西館9F
「森と人」 TEL: 054-255-4488
編集・発行 FAX: 054-255-4489
E-mail: sanrinky-moritohito@gaea.ocn.ne.jp
http://www.moritohito.jp



この用紙は、間伐材を原料としております。